



へ18 持  
門 459  
巻 107

消  
福  
流

重修真書太閤記十一編卷之十九

石垣山一夜城の事

并北國勢松枝城責の事

去程さるほどに關白くわくはく殿下松田々内通ないつうのむ孫まごふより堀左衛門督とく秀政ひでまさとせむ石垣山いしがきに御動座ごどうざ何なにれり地理ちりを察さつし玉たまふに究竟くわうけいの地ち形かたちうとふ不ふしめさるる御陣ごちんをうひせとけふか孫まごて得えたまふ割普請わりふしんの法ほうを以もつてたぐ一夜いちやにあまの役所やくじよ矢倉堀やくらほりを作つくりてからへそのうへに杉原紙さきはらふり張はりせたまひし後のち小田原おだわらの城しろより見ゆは處ところの障さやを向むかへて松杉しょうしょうの枝えだ

同  
攻  
會  
印

とらをさうらひし不と子夜あけく城中より是  
を見よき何の程みこの処子御陣をうけしれ  
ふやまきこの程の普請をいひの間子おされや  
何さぬ關白秀吉といふ人の凡人とおもふも天  
狗のかりみ世に現るは子やと城中の上下肝を  
つぶしかくておのりみおひりたる方便をや  
かしたまふらん不思議といふもあつあり恐  
おそろくとうちあり。語ひけり關白殿下この  
處へ駿河殿を御招請あり。矢倉に上らせたまひ  
よく御覽へし。この處より見よし。北條の  
北條の居處の手よとほ如く見えし何さぬ海河

の要害といひ箱根の嶮岨といひ天下無雙の地と  
いひいへし。此の處へ敵をむらうは  
北條一家の運のふたおとすは氏綱氏康か  
んとからは箱根をうらみあて。軍をしゆん  
そのを何とおさへくみやと仰らまはし。御尤  
の御誕とこそおなえはかきと式代したまひし時  
北條の百日内外にめいぶらうしゆへし。そのうへ  
關東八ヶ國を御領とさしたまふへし。御契約の  
うへ。矢倉より御下。廣坐敷に於て御酒宴あり。其  
のりさし。軍の御評定あり。駿河殿の御本陣  
み御かつりあり

此時御酒たてまひつゝ、京北野の山下ぎれお  
 けり。と、いひ御着の梅下八のからをこ八せれ  
 于鯛八切關白殿下の御家人大草をまゝ調進  
 せと、いふ  
 折ふく大雨ふり来り車軸をかかゝり杉原も  
 て張たふかべのいたゞやきんとこつて海づらひ  
 けふよ不思議や雨をこつて壁もあゝらけ折ふ  
 山ろとつて二聲三こゑをこつてまゝかは關白  
 殿下  
 鳴たゞよ北條山のろとつて  
 と折けふこかや落城の後みおめへの實も調

伏の匂みくぢありくは關白殿下の御旗本みの九  
 列の旗かゝら嶋津兵庫頭義弘大友右兵衛督義統  
 中國より小早川左衛門督隆景安國寺慧瓊法印  
 をろめろつて峯のろり谷をくぐり陣をせ  
 け尤みの長岡越中守忠興元津侍後信兼浮田宰相  
 秀家近江中納言秀次中村式部少輔一氏堀尾帶刀  
 忠晴一柳ろ人數山内對馬守一豊大垣侍從輝政蒲  
 生飛驒守氏郷尾張内大臣殿の御衆みの澤井左衛  
 門天野周防守土方勘兵衛瀧川下總守そののろを  
 四國の長曾我部侍從加藤左馬助等の海賊船を連  
 退して海上に兵船をこぎあちへたりまゝ右の方

ふの駿河の大納言殿その御内ふの榊原式部少輔  
 康政大久保七郎右衛門忠世酒井左衛門尉忠次井  
 伊兵部少輔直政松平周防守康重牧野右馬允康成  
 以下數萬の軍勢かふとの不しをかりやかゞ鎧の  
 袖をひらぬひく尺地もあまさひくひくたる又  
 東南の濱路ふの長谷川藤五郎秀一羽柴左衛門督  
 秀政照坂中務少輔安沼里見左馬頭義康以下西南  
 の海をともまゝ陣をかへくうちひく潮路をか  
 かみくくせの取柁をしかぢ搔楯かき艦ふも舳  
 ふも立ひくけたるもくの手風の風ふかひきておひ  
 たぐく數方の帆かけ海上に浪をたぐくくくく

ありまゝゆかゝふよひかきくく空やいひまこ  
 石やしまるはまここの城東西五十餘町南北七  
 十町周廻五里の大城あり總かまへの堀ふかく石  
 垣の上まかきひらぬたる矢倉の内外は家々の紋  
 かきくは旗いくかかまひはかへしたまひたと  
 へり吉野の瀨の花をちみ似たり役所たるの  
 ちりひろく武者乃たてぬのせもからひ夜に篝火  
 のかげあかくひはを編木のをとたかゝ殿下この  
 城一旦ふの落まゝを退屈かきやうふおひひく  
 のかぐはをせよたぐ夜をかり堅固なまゝとこ  
 仰出されゝふとよひるを暮まごろく或は酒宴を

大略言十一編卷十九

たのしきまぐの爐をかまへ朋友よりあひ敷奇を  
 たのしむ甲冑の路次つり小具足の亭主ふり世よ  
 めのらしき茶の湯おろす又五月雨のふりまをり日  
 をかさ杯つらみ總陣何とあらくさびとてたる  
 体を殿下をこめ御本陣みて早歌をうくるせ  
 隆達ふよおとろをかけたまひか上下うた  
 たちまめる心もくゆくと新しくあるかくて  
 いくろふゆとも争てる勞とをへきとくも  
 ころのくく出まらつそのち御陣中御茶  
 屋をしつらひ橋立の御壺玉堂の御茶入をかざり  
 御客ハ駿河殿御相伴ハ細川玄旨由己法橋利休居

士御取もちみ前波半入御茶のち十六七より  
 二十をかき若女房のらゆきと酌をとらせ  
 金銀の扇をひらぎて柏子とりざんざの松のこ  
 糸のどけしと鶯の志をあらうてらひ  
 けし下々いし上をまふひか陣所又生  
 涯をおくらとやと心の底またのしをさぬ者  
 小田原みかやう軍を止め  
 二十餘万の兵士いしゆくゆみたのし  
 ける中北陸道の大將軍羽柴筑前守利家卿上杉  
 弾正大弼景勝二人乃軍勢六万餘騎みて上野國碓  
 氷郡松枝の城を十重をくそみむるまき一時せめ

不責おとさんといひしめきけり城中みくへ大導寺  
 駿河守政磐嫡子新四郎をきめいひしゆ義  
 を鉄石子比しむしら忠をいくり野外の鬼おふ  
 と降を乞て安逆の世まをまどとおひひをり  
 と形連の時うて夜討をかけあまひの朝ぞり  
 と是間み衆して寝ごをうちけふよより寄手  
 不しゆめくあまし此城み手間とふらち關白殿  
 下小田原を攻をとたまひか何の面目うあら  
 んと両將のく海安から是非責をとさんと  
 かしはといへとも城中志のまりかつろ音も世  
 以寄手をちりくと引ひけ鉄炮を打つろ矢を

射けるみ大勢う我先みとこよせたる処おれ  
 玉一ひよ二人三人の損をふとも仇矢のちらみ  
 かりけり日々のせう合お連の勝負はかとい  
 みしゆ一定おらといへとも城の本人大導寺の  
 嫡子新四郎直繁世まをくも勇士を色へ逞兵  
 能登守うそかへまをりか火をちらして戦み  
 処へ加列の先陣長九郎九衛門尉連龍山崎長門守  
 長隆奥村助右衛門尉永福不破彦三前田又四郎村  
 井出雲守長頼青山佐渡守忠一篠崎出雲守正本横  
 合よりうちいひはを新四郎足むそせ以藤田

手へ突ていり手をくくをてたくかみたり山崎長  
 門守長隆新四郎を目みかけく鎗を合を新四郎ふ  
 つかつり何そのそ推参ありといひなるあら十文字  
 の鎗を引去おそ丁とはけのあやましく長門守の  
 草摺のとの道を去りかまひく長門守馬より動  
 と落ける成郎等ともかけふさかりくこれをたを  
 く長門守からくして危きいのちたさかりく馬  
 乗ふを以をく奥村助右衛門尉不破彦三前田又  
 四郎のかざりとをむかふ前田の郎等河内山半  
 左衛門尉定勝一番よ外曲輪のりり火をかけ  
 たり是をて廣瀬藤左衛門原九郎左衛門河合又

右衛門堀江造酒助のひく乗りりおかしく火を  
 かけしかば新四郎いまたこれまくと死その狂  
 ひまをば処へ父の駿河守をて曲輪よりついで出  
 新四郎をさくひ城中へひりり日をして夕陽  
 みおよびいかの寄手ゆををるべまはる夜  
 まいり前田河内山下知して足輕とれ残さくり  
 三十人らかり器具一夜まをれ城中へ志のび入  
 ろくかへ火をさけりけるふより城中以のろ

大導寺父子忠死の事

并大導寺系圖の事



かくく松枝の外曲輪二三の丸とも焼上りけか  
みより城中大に狼狽いひしむり本丸に馳入  
まろし弱きを以て以て嚴重にこれをまもり鉄炮  
をくち矢を射出せし雨の如くありしかの寄  
手業に相違し此城かたわりの手こころありへしと  
いかけくもおもくぬと形むのちと攻あくん見  
えらば処に羽柴肥前守利長の鉄炮大將に長田權  
左衛門尉大剛のその形むの真先まきこけるを  
利長とあり見付竹東の傍まきよせゆるの長田  
權左衛門尉ありと見付あり長田まきかめけ  
けけけと下知せらるるとよ横山大膳亮長雄と

名乗とせよる長田ま力を合せり城中より  
大木大石をかけかけくを先途と防ぎか  
ども横山まきここれに恐むし手のそのどもを  
まぎまぎ命の二のよき名不しとる  
ありと名不しと油断して怪俄とふかこれを  
手本にせよと真先まきむと長九郎左衛門尉  
まきと横山り横鎗いれと後るるか若やめども  
と下知しりし郎等關宗右衛門おかり又  
八郎長尾宗三郎須賀四郎かんと北國に名を得し  
一騎當千の剛のそのい我等をやいへきと出  
めささるんてかけたてあけを大導寺新四郎あり

大岡巳上編卷十九

と見えくあはれおそ長のか即左衛門尉かき取り取て  
不足かきいざ参ると聲かけく操りて以十文字の  
かき徳せそのかやくを雷よりりまきとせり  
新四郎り即等又玉澤六右衛門かげの如く立るひ  
くもころりりかきとら城とあはれかせぞりり長り  
侍關宗右衛門を突たをき首をとらんとかけよは  
を關り弟又四郎兄のかききおろけまのくおと突  
かきはを新四郎ありかへりさぬ鎗とり直りさき  
とつきはらぬく關兄弟らとせりかハ長りせかへ  
大よとぐれたち長尾宗三郎須賀多四郎以下十余  
人枕をかへりうたれけり九郎左衛門尉是等り

死骸をのり越り獅子の兎のあはれたるかおとく  
從横十文字追ひかき巴の字乃如くかけ廻り  
つき立けるそと大尊寺りたのめ切たる玉澤六  
右衛門をとりめ七八人おあきまくらりりきふせ  
扇ひらひりうちほらひ氣色をみたるその処へ長  
り足輕大將り堀内權左衛門尉りりり大尊  
寺り侍川越半三郎と鎗をあをせ終り突かち半三  
郎り首を取るこれみ氣をき長九郎左衛門尉城  
中へはけいらむととととと大尊寺新四郎  
解入せしとこれを支えりかとも新四郎ハをりり  
小三百餘騎おれり過半うとせて残りハ手負形り

大問已二編卷一七

長ハあらざるらへ大勢ありきとて突まると  
 せし如く城中よりきびしく鉄炮をうちつて  
 新四郎もあきらめ合せしハ長勢もきくこ  
 糸牙をかんぐぞひかへける信外勢の中まても  
 依田小笠原真先かけ責たてし城中より撰  
 打よりちまきめられ塊の去るをわし入け楯の  
 やびまかく居たりはとよせ平ハ大勢あり  
 入かへしちたのる不ども駿河守父子一  
 うちよ今ハ是まてぬりせよひらくへき運  
 非を我々二人自害して猶のこは士卒のいのちを  
 たをけとやとおのハ如何とありしハ新四郎

も同意し使者を長陣へ送りし弓矢の義理  
 今日かぎりぬり我等父子二人切腹はるまのへ  
 籠城のせめども筋目あきかろを武士ぬり助命  
 の程糸ひ奉ると申表は長九郎左衛門尉この  
 よしを筑前守利家卿に申ける不利家卿もか  
 くあり即日九郎左衛門尉より柳三荷有相應に取  
 せらへ使者もよせ御口状のおもむき具さし承  
 知仕る何さゆよ詔し御心中大將も不  
 感心いしはは御あはれ志びりし御用意あるべ  
 く籠城の兵士も於て一人も別条あはま  
 しくはと申入けふよより駿河守政磐生年五十八

歳嫡子新四郎直繁十八歳書院またくといかせ長  
 九郎左衛門尉う検使をまちけふ九郎左衛門尉  
 の侍大将長八郎兵衛岡山新九郎二人城中へのり  
 大尊寺父子を面會し最期の懸念何事も申置  
 此へと尋常に埃撥しけとハ大尊寺駿河守弓矢  
 も相應に取て此へのころにマもあら年ころ  
 たらちに道は此へとも此月は心中騒々く  
 取らして此へハ心の不とを述はすもあらくは言  
 只今もや今生のひまあけく胸中のとかまありて  
 此らり  
 のちのよの限りとそ遠き弓取の今ものまははと幾も

言の葉をのりくく不始て面會すくくめて離  
 別仕る工の残り多く  
 見教人もいらはく我もとちを葉のおかくらてか  
 をしめくまくまくと吟し終り駿河守莞尔と笑ひ  
 腹上文字が牙切を森半九郎介錯しるゆおる  
 腹切たり新四郎の父のいく腹をくく  
 ハ長谷川九郎左衛門を介錯し父子の死骸を  
 とりをさめ検使をむかひ今ハかくあきは形はハ  
 御もろろ茂蒙り葬送の式執行仕度を申はルハ檢  
 使子細かますを申けぶより城の乾のままよ  
 て火葬し白骨とあらるを二川の壺ををさめて

城下の寺はあひけ事終り一のち長谷川九郎左衛門  
 門あところまやうみかき志はしそのち自害して  
 果たけり此大導寺駿河守三代の祖大導寺孫太  
 郎といひ一々早雲と共に關東へ下向たり七  
 人の内あり本國を山城綴喜郡田原郷あり其もく  
 田原郷といふに延曆寺の末寺大導寺の領ありて  
 預河の山背氏友光といふ友光の子友武女子のそ  
 ありて男子取河内守紀文任の三男内膳正久宗  
 を婿とて預河職をゆづる久宗の女少納言入道  
 信西の妾と取父の譲をうけく田原郷の預河村  
 又その女の生處を安居院の澄憲法印といふ澄憲

法印の孫ありて依助警との久宗の嗣と取田原  
 郷を進退して大導寺の太郎といふこれ大導寺氏  
 の祖ありそのち大導寺内藏頭高重みいつて男  
 子取これの伊勢平氏峯四郎兵衛明宗の三男平六  
 郎明重をやしかみて子といふ是をも内藏頭明重と  
 いふ明重の子太郎左衛門政重のちみ内藏助と稱  
 する駿河守といふ政重の妹伊勢雅樂助貞重の  
 妻と取て生る處を大導寺孫太郎重旨といふ  
 これ早雲入道とせよみ伊豆相模をそりひらきた  
 依功臣ありその子を兵庫助重興といふ川越の城  
 をあひかり人取その子政警取政警の嫡子

新四郎直繁二男孫七郎氏景といふ氏景の氏直よ  
志くかひ高野山よの不々々後みめ一出せれく  
三千石を領しけふま伏見豊後ささみく喧嘩し打  
果し死さその子茂友山といひひりぬ

永祿二年二月記せし北條家知行役帳み大導師

百三十九貫九百三十二文 豆列中村八十貫文 同

吉田八幡野 五十貫文 同青羽村 八十八貫文 同茅

原野 九十四貫六百四十文 西郡理目 五十二貫七

百六十文 中野小鍋嶋 五十九貫七百文 同所高増

三百貫文 櫻井元渡已下三郎跡 以上八百六十五

貫三十二文 此内七百五十貫文 前行役辻自昔

除役間於自今以 殘て百十五貫三十二文 此内

後可為其分也 五十九貫七百文 小鐘御檢地増分役重而 此の外

八十貫文 武列入西高坂半分被下 二百拾一貫百

十二文 川越三十三御寺山 五十六貫百十二文 同

小室 以上三百四十七貫二百廿五文 此内百七十

三貫五百文 當年改て被仰付半役合九百廿二貫

六百文 知行高辻都合千二百十二貫二百五十七

文 數人差引

重修真書太閤記十一編卷之十九終

重修真書太閤記十一編卷之廿

北條安房守氏郡降參の事

并八王寺の守將寄手を勵む事

長九郎左衛門尉連龍々々々々松枝の城を  
 落しけふより北國勢々々根城々々兵糧運  
 送その便を得たり抑九郎左衛門尉の對馬守連繼  
 う次男みくをいめハ幸恩寺といふに住持たり  
 か天正五年温井備中守満兼三宅備後守長盛が為  
 み父と兒とをうくしとを傷む還俗して同七年  
 越中國森山より能登國福岡に出張し八坂山の城

をせめをとう。城主越中守小腹をらせそのち温  
井三宅と合戦。つゆよいのゆ九郎左衛門尉勝利  
を得ははい。能外半國をさひここれと主とあう羽  
柴筑前守利家も属したる。天正十年上杉景勝の下  
知らして長尾與市景連能登國榎木といふ処へ押  
けり。近邊を切あかへけるよ。聞えけし九  
郎左衛門尉自國の事あうゆか。せよあをへり  
いと。檢使大井久兵衛と共まかけむかひ榎木の  
城をさうかま。短兵急に攻たて。か。與市たま  
らひ。みげいごけふを追ひめこれをうち殺し首を  
とり。利家もおくり。か。利家大よるこび其

首を酒みひくして安土へをり。信長公の實檢  
入る。信長公その軍功を賞したまひ。感状を下  
した。さ。い。不どの勇將あう。さ。不ど。武藏の國  
横見郡松山の城主上田上野介。小田原城も籠  
て城も。難波田因幡守。木呂子丹後守。金子紀伊守  
山田伊賀守。若林和泉守以下三千余人も。籠  
る。上野國の城も。い。前田上杉の兩大将  
降参。あ。い。を。三月十日。かの四人より。  
禪僧を使節。降参はらまつ。御先手も。ハ  
ふ。へ。を。申。い。と。け。ふ。も。兩大将許容あうて。  
本丸二の丸を。三の丸も。諸士の妻子を入

大関記上編卷廿



をき四人のこのを案内者として同十九日氏政の  
 舎弟安房守氏郡の出りて同國兎玉郡鉢形（鉢形）の  
 城より出よせり藤田能登守ハ三ツ山の城の防  
 衛のため足たよりの城を修造しけりふとねとねく  
 せむれも成就しけるよとより永井刑部ハ五千餘騎を  
 そへりのまゝ置永井右衛門大夫をせむかひ木部  
 郷原よて出りて大將景勝をもちけりまゝく  
 先をかへを請取おしてゆく上杉勢ハ松枝より上  
 道八里とかりさきへ出り鉢形より四里とかりこ  
 ろより陣をとほ前田勢ハ鉢形より五里とかりを  
 つてハ王寺の城を右よかり荒川を前よあて

陣をたせり鉢形の近處ハ八幡山といひハ雉子  
 り岡ともいひ夏目舎人助四代の祖有田豊後權大  
 掾定基（定基）館形（館形）定基（定基）と住しててちめて夏目  
 と名乗り形り明應元年四十二歳入り早世しな  
 ぬよりその子豊後權守定盛十八歳入て家督し相  
 傳いりてと住しける後ハ相列長尾よりい  
 るその子左衛門尉定虎九歳入て父を喪いしむハ  
 終ニ雉子り岡をうりかひり形り志々はみ上杉の  
 家中騒動しける隙に乘り北條家次第ハ手をひ  
 けよくかるまゝと雉子り岡ハいりり鉢形領と  
 ありり形りはとこの邊の郷民とも夏目を慕ふ

そのも多くかひわ人情ふる北條をいとひ新ら  
しき地頭をかくりかへどおりのよりさむく方便  
去りかよより安房守氏郡も今ハかかみすくと之  
かく當家の運はくは処なりとおひひをり難波田  
木呂子金子山田かとを以て降参を申入安房守ハ  
城下青龍寺よりりり剃髮染衣のまかりとなり何  
處ともかく落うをたり  
甫菴本又針形の城はかよせ仕よりをほけ弓  
鉄炮をうちいも鯨波のこゑ天地もひぐくぞる  
了なり上野國沼田の城主猪膜能登守もこの城  
みありははる近年このへんよ於ていとこ合

合戦の方便とハ上方勢のかけひきとほかよ越  
よろりり覺ふるそか困窮みせまり屈服せハ  
後難もそのり所詮降人となりよろりからん  
やと五六人の家老も相議しけは尤去りはへ  
からんとくまその義も同じをふち松山の  
四臣難波田木呂子金子山田等もひひとこひ  
たりははるれも城をうけたり先駈の勢も加  
えよろりとあり  
永享記卷七子沼田の城主猪膜能登守も當城は  
何よりか主よりりり降参をこれハ小平六範  
綱子孫も武勇の家こと能登守の楚忽の

そららそらみくこの度亂逆の根元なり他人の鬼  
もあれ猪俣よ於てハ死を専途み守るへそみ敵  
みやおせりらん人よりさそみ憶しける安房守  
氏郡も元來武勇まもるる人かましかとも一  
門といひ思量あるへそみ甲斐おく降参し城下  
の青龍寺よりつりて出家入道して沙弥のまか  
みあつたまふと云ふ

このよし追々注進ありけり諸大将いひまもめ  
ごたくはとよりこび申上げおみ關白殿下御感の  
上意もなり所々の城々いひまもさそをぢ降参を  
はとののそみして手つとそ合戦の注進ありかく

てハ武威を去めはまたらけさハおれを以やと仰  
らせしとぞりそそ又伊豆國賀茂郡下田の城主  
清水上野介を關東のようけをそくみ北國の大勢  
まてま碓氷峠をうちこし碓氷郡みて松枝利根郡  
入ハ治田群馬郡又厩橋箕輪をのりまへる落城  
剩へ一族の中みまもたの切たる北條安房守も  
鉢形の城をひらきて降参しその身ハ出家入道し  
て世を遁れしときをえけるみより上野介も今ハ  
せんやくおし並山山中をたや落城して敵大勢満  
ちちたり小田原もいほへきたよりもあし如何も  
もして武藏相模のちちあいのり計策もなまへそ



此兵の道々末代まゝの名をこそおしめいのちの  
 義よりてか海をよめとそく出羽介ごとそよの  
 かどならぬとも義理のためまをのるいのちの惜  
 からしいのちも我と同心あらば法をたすへと  
 呼をりかあ追ひめあくまひらき合火花  
 をあらしたかひのらちみ出羽介終みうこれ  
 けりそのち寄手いよきをひつれぬ城中  
 以のりよ周章しゆまとも中山勘解由狩野一菴  
 三の丸ありきこころもさかひ弓鉄炮を配り  
 堅固な防戦の用意をかか加賀越後の勢の先手  
 々大か上列武列み降参せしそのあつかり

中山狩野の知音乃をのあるひの一族ともみてい  
 のちも親しきをの共おまの打より中山狩野  
 のをへ使をたてえやこの方へ御出へ御本領  
 相違あらしと申けぬ中山狩野一同當城を陸  
 奥守よりおびかりくはかぬ陸奥守の下知か  
 本おまとも此城をいづれべや武士の道ハ左様  
 ぬあまををのをといつ取合を次は籠城の  
 士卒のいのち残たきけよとの御沙汰これす某  
 り手又付兵士一人みくも主を見まていのち  
 生んといふものぬくといひ使をさかへ  
 あり

藤田能登守夏目舎人助よめつゝのまけと鎗を與ふる事

并加列勢八王寺の三の丸を乗取事

三の丸の丸のいりし法はひかへりく中山狩野なかやまの口狀くちじやうを述べわの難波田木呂子なんばたきりこ以下心中しんちゆう又そのかゝくおのひあからまへをやらうもかりれん點然てんぜんとして言葉ことばかゝまはは藤田能登守ふじたのりたのり郎等らうらう八王寺のその三人ありあは中ちゆう平井無邊ひらゐあへんといふそのの此城の案内者あんないしやありけるよりこのものを先まへまたて東のやゝある谷の間たにのま乃水の手みづのてを法はひ三の丸の丸におよまをへしと評定ひやうてい一決いつけつしてまごぞよ打たんとせし時夏目舎人助あつめとめつゝのまけと持鎗もちやういくくしたりけん真中まなか

よつ不ふぎと折おたりかゝ居ゐしその共ともあかいまちと見たるけふ如ごと能登守舎人助のりたのりたのりをちかく呼よよせ軍ぐんむかふのいまゝたかかえはる前まへみやりの柄えを打うちをりし手てからぬりしとこもあゝ御ごみかくへあらひはりながら替か鎗やうとりよまは間まも手明てあきて心こゝろあゝかるへしといひひ能登守の鎗やうをちつとろ馬の上うまのうへに上のぼりしとちちふり天晴あつせい手ておろふし快たよこの鎗御邊やうごへんに進上しんじやう申まをし上田原かみうらの常陸介殿ひつちのせいのみやうの持鎗もちやうなり不識院殿ふしきのんいん謙信けんしんの上田原かみうらの子息こそく宮王丸みやうじやうと申せしをえりめ吉江喜四郎きちえきしじらうあひけ置おけ

一う。今ハ信吉の手ハあひかり藤田源五郎どのと  
申そ常陸介どのハ名たりき勇士おつその方もち  
ルハ何やかりゆへと祝したる寸志おつせられ今  
日の軍ハ藤田陣よりせめりて申へくハ延引  
去る加賀勢ハさき城をたどるる殘念おつゆりと  
て東のやりの谷のそれたる処もあり路次あり  
難義あるべしルとも堀尾但馬守を相具し我等  
ら旗本を下知したまへや敵このうちをばよも知  
しそやくその如きいさうむを煙をたてられハ  
へこのあうみともおれを相圖ハ亂れつゆへ  
といひけしハ舍人助大よよろこびかへりけきを

次第おついろも此鎗を以て當城をのそくつ  
甲へくゆと勇まきく水の手せりてそくつ  
夜もやし一明りてハ羽柴筑前守利家の勢共  
山下曲輪をのりやがり首ども實檢おつえり  
ハ利家見をとりおつてハ褒美をおつえたまひ  
けるのち利家諸物頭お申されける當手碓氷を  
こえりよりかくべし骨折たるいくさお殿下  
の御誼ハ武威をききに似たりと仰られハ我等  
み死との御下知おつとおめひきり當城ハ向ひ  
一処面々のとらきよけしハ我等腹をふみ及そ  
去とく大に笑おせたまひとつおれより加列

勢山崎長門守前田又四郎青山佐渡守以下肥前守  
 利長を大将として三の丸におよせしつゝこの処  
 ハ中山勘解由狩野一菴とつゞめ防ぎけふ  
 より足輕とち敵をちりりと引付あゝ矢あきや  
 うみと制しひりうせし見らる内は手負死  
 人数百人におよべり利長の小性生年十六歳一番  
 乗入組討し首とる大音藤藏と名のはと再三  
 攻のり二番首をとる利家父子の前は持参しけ  
 此ハ利家よろこび一番首よとのまひ一時彦太  
 郎いやぢれかしの二番首みは一番首ハ藤藏とい

と申け此ハ両大将そのころ終さし成賞したまひ  
 一番首よりおとけり増たる手柄かといし  
 一とけり城中より金子三左衛門尉市村一學以  
 下五六十人こゑり二名乗てをりいで火花を  
 ちらしてたくかひけるほどは寄手もおなく討ル  
 さらハさびをかみむはをのめかからど備えまを  
 らよありて既突くのさとしと見えゆと利家  
 父子ひく取しめと下知しけるみよりはま  
 名を惜み義を重んじ侍共此ハ入替く攻立  
 たり金子市村とて討るへく見えし処へ中山勘  
 解由狩野一菴手勢を引具しませしころ金子市村



をさく入る無二無三切て入替めいさ不ひ烈風の如くをらめく穂先の電光石火の如くみて面をむくへき様もぬく加列勢出りて六七十歩ひき去りてをけり成て前田又四郎が鉄炮の大將たる河内山半九衛門尉真先もまゝくんで堀をのり越ちちまち一人を法をみせ首をとるちち出るとを城中よりのがさくと大勢もせめ付たり半左衛門もて討るへく見えける処へ山崎長門守る家人堀田前左衛門と名乗鎗ひつぎげてちち入金子を目まかけ突合けふいりまか志さうけん兩人とも鎗を打折るかハ出らへて無手と組

終に堀田くちかちる金子の首をとち中山狩野出れをきて口惜や金子をうぐをたういで前左衛門尉をうちとりる金子の供養もせふへいと潮のこく如くかけたりか加列勢も押かへせんて見えよる前田又四郎味方のくのゆきをり目みりかけ以足輕どもを雁行もせぬへ一同は鉄炮を法うべもぬく放りぬは中山狩野の手のものを散々も打らまされ下りきてこれをさけ烟のまこしうをらく処を見ます立何かりて鎗をいせ死めぬるひみ狂ひまふ加列勢の中より誰よりありらん射たりける矢中山勘解由

鎧の披きて立ける哉見て狩野一菴大音あげ  
加賀むしやむはくも手あらは射たるやふと  
よましくまの中山勘解由ありやうり

中山おろしとげしきまきみといひまて  
と笑ふ加列勢をを口惜とやおひらん  
の如くよ射かけかとも中山狩野の身また  
兩人も軍の尋常は仕たるまこ引去り  
はくまやとおひむらか加列勢をおひかひけ  
突らひ三の丸さしてひきあはを加列勢のかま  
ましと取まけり狩野の手より小林隼人正次荒井  
治部少輔照治同兵衛三郎ひきかへし鎗をとつて

うちせらひ突らひかきつはその勢をけりて  
逸りきりたる加列勢もあしらひか孫をこつため  
らふそのひまも中山も狩野も一同三の丸の木  
戸をいうけふを見て小林と荒井も共は駒かけを  
急さる北條陸奥守の侍も小林隼人正次荒井治  
部少輔照治同兵衛三郎と申しその形その身人  
かまみゆる孫の名乗はとも知人もあはへらひ  
はせともいのちおしして降を乞ひ臆病武士とい  
ふとやう義を重んじて忠をたくり死をかろく  
して思をけしざりころきしをわらむむか  
の人みもいさか取きとおえぬとやくこあ

へ御入仕へ我等の首を引出すのよ。参らとへといひをとりいとのだやかみ城戸のうちみつういかに寄手もこれに勵まされ無二無三に攻めめて三の丸の出し堀ひとえ引やぶらうおとらふまけいと乗越く。おめをばあんで逃入ける。天正十八年六月廿三日ふてぞあつらふ

北條五代記ふ。天正十八年四月廿二日。北國勢八王寺の城へおしよせ城をりくまへきす。使者を以て申入し。狩野中山もらひみて使者を討ちて城をりくまひよつ。二十三日亥の刻より責め。終は城を攻をりけし。

中山と狩野の自害の事よ。記をり。内通共中山狩野もらひみ。使者を殺まへき。非以たぐ氏輝の居城をおのり。義と思とを忘。是はるの正心ようよく城を守り節を正しくせし。おし。本文を以てよろしとん。

重修真書太閤記十一編卷之廿終

重修真書太閤記十一編卷之廿一

北國勢八王子二の丸を攻る事

并長九郎左衛門尉父子勇戦の事

八王子三の丸追手の羽柴筑前守利家おかしく肥  
 前守利長上杉弾正大弼景勝の勢をすまぬく楯竹  
 東を仕寄る息をりけりせ以攻たかか利家諸手  
 を見まわす諸物頭をよびまえさくいと逃げけるは  
 いか少年の頃尾列みて所々の軍も手をおとせ  
 たつらみいひも相應のささけりいよは弓矢取  
 の身も取て不足かるとおゆひたり我れより故殿

信長 伊勢道江みむかふ軍あまへん。我をよこし  
も母衣を免され元のごとく一騎打の仕合か  
それの母衣の衆の武邊赤黄青白黒と組あをせて  
敵白母衣みかしの黒母衣ををくひ青母衣  
これよはぐり赤黄次第みらちあひをりむき人と  
とかさきてはらみ一身のものをらきといふと  
そのうち國をあひかり城の主とぬりゆき一身  
のものをらきをむ祓とま侍を万二万と引具して  
母衣組の衆をひかりち弓鉄炮の三組とかさ  
るかとよか時よとりての軍策ぬり今この城みむ  
かふておめへの北國畿内のいくさぶりと様替へ

大手搦手の不ろみ伏を用ひまのにかかひかて其  
伏をおくと易をふ似ておれをかくて我れみの  
去のびの巧者みはるを祓のかるまきり面々  
その心してかせたまへといひゆ終らぬ不どよ  
一聲ひぐく鉄炮の音みの上杉方の先手藤田能  
登守八王子の城乃東の谷をよちのぬり水の手を  
さしてせめかりは城中みてもこの処の堅固ある  
間道ぬり寄手はらみおめひよはまくと油断の  
は処あまの中山勘解由狩野一菴大みをころを敵  
この処よりこもいうたらんよの城中實はふせ  
かへからんと吐息つをく士卒を去かへ坂口

へ突つていびる寄手よせのこの八王子みて産うまれたる平  
 井無邊むへんを先ままたてくさりの不ふしの狩野かの一菴いん手  
 より並なみ榎大之丞おおいのぢと名のうらちいさ平井をきつと  
 見てをのこ無邊むへんめこの八王子まで生長せいじやうかから  
 陸奥守むつどの居城いじやうへむかひ間道まぢの案内あんないゆる無  
 道みちそののかさくと鎗やうをとつておろしゆきよゆ  
 けしの無邊むへん莞尔わんじとらちりらひ八王子も生長せいじやう  
 そのう陸奥守むつどの息いきをおかぬ不ふど知らぬ陸奥  
 守むつどの息いきをうけしそのかきみこみて死しまへ  
 手てもはらあらは落おちしそのも何なに降参かうさんせしものも  
 あるぞかしくその不ふうり並なみ榎大之丞おおいのぢおめへの文ひき

き女むすめどもおの御大将おんたいしやうよよく申へし早はや降参かうさんし  
 二ふたひかきいのちをのべ人間にんげんのたのしさを伝つたへせ  
 よとおさりらへの大之丞おおいのぢみくし無邊むへんりひ糸いとや  
 その息いきの根ねとめてくれんとせやくはを無邊むへん引ひ  
 さのりし坂さかを上のぼりし手てもとまで身みをいしんと  
 さりの不ふしを大之丞おおいのぢいしんと刀やいばをぬきてさり  
 せらへ無邊むへんの両脚りやうきゃくかけて手てを負おたりけしとも  
 名なを得え剛ごうのそのそのまかけよせ大之丞おおいのぢ横よこ  
 腹はらぐさと突つかからしふしよ伏ふて息いきたえたりか  
 かは必かならずへ夏目なつめ舎人しやにん助すけ藤田ふじのよりめらひし鎗やうをもち  
 むつり坂さか口くちを息いきをもちしとせめの不ふりこの体ていを

見て一人の平井無邊あり手を負ひる可愛やと  
いひかから引あをせよる息合のくまるとり出  
平井の口まぐまきれはちあち息を吹かへ  
立あからんとあしかとも兩膝をきりれてお  
たしんかすらさ先したるを並獲大之丞なり夏  
目これを見かつりいと不しや大之丞八王子みて  
の弓取とおむひしその運のきてか仕あそ  
世あか何をもと涙おとすてきくもやく利家卿の  
この手みて軍さしあつとそくたまひ不思議か  
るかおきさやうおむひ付しよりさやく上杉の  
藤田のうかふ方便おそしとゆてし不識菴入

道謙信のいささふりよくも傳えしそのかみ大川  
み水たえは旧を家と道のこけといふたとへのみ  
しそ是あめりおそかつしそ人々をくもたうや物  
かしらどもと躍り上りし羨まじき人藤田の手  
へハ甘糟備後守おあし詰よせ小屋へ火を  
かけしは三の丸の表さまかけあらへたるを  
役所くふ火うけそのうへ王薬たくをへたう  
ける穴藏は燃のきしどな天地も一度も震動し  
そのひびきおひたさかんといおろろ形う加列  
の手より長九郎左衛門尉連龍山崎長門守長頼奥  
村助右衛門尉永福同助三郎篠原尾張守等大手を

大月二十一編末十一

是非のつやあらんと操りてせめ付たふり  
 中も九郎左衛門尉連龍上杉は搦手をとられ何  
 の面目あつらんかよむかさんやこの城門をまくら  
 とかしく死杯やそのともはくけや〜とこゑを  
 からし息をそらて下知しけしは日頃のちをり重  
 代の思ひむくふはひ今この時よと能列勢一足も  
 ひらむを責たつるを真田小笠原の衆をふかよして  
 我等ハ東國の案内者あり北國勢も出ををかけら  
 る出もあし口惜とのり越〜ま〜ま〜あかひをそ  
 大手の門の出堀一重ひきやかりたる城中よりハ  
 狩野一菴これをきて阿比の信濃の真田安房守よ

ごさんかれ敵よりつてぬよい敵形も打落せ  
 足輕どもとまきりよ下知してうらせしは真田  
 小笠原もあつたけよとやれとよ志を退去  
 てせ〜し得以一菴大音あげきさなり真田安房守  
 出くハ依田小笠原もいくさハかくこゑをふせの  
 よ能見からふも手本みせよ北條流の武者ありハ  
 せりとも天下ハ敵なきを我とおりてくよの  
 たまへかくいふものハ伊豆國の狩野一菴年のも  
 まで六十三軍もあふと大小五十餘度手柄の首ハ  
 十八その不ろ人ハあらしと〜さら手關東武士ハ  
 いのちも〜か口僻もまていひゆるぢやと出ぬを



さけんで切まへる大長刀の刃はくらくらあがはく  
 血の紅の秋の紅葉は異から長九郎左衛門  
 尉山崎長門守奥村助右衛門同助三郎あはれをきて  
 まともや狩野一菴よいく参ると聲かけて前後左右  
 よりさうやうはと事ともせはうさへをらひ切の  
 ひらき四人を相手よ一交らせはたかかみたり九  
 郎左衛門尉馬をかけまゑいふは狩野どの手柄の  
 とや見えては但し北條殿の御運のまゑとたまは  
 志はこの城ととも持こへたすべきよあらは  
 早く此方へ御出ひへよ治く大将へ披露申へく  
 の御年を承りてへ御子息たもさぞゆあらん

後日の栄をお不しめせといをきて一菴大長刀を  
 水車よまへしそのあうの長九郎左衛門尉武士の  
 作法の志のたふあらめはまをたやうのたをこと  
 へこの一菴をだすて生捕るまは治かやあらは  
 る何ゆへに見事なりとも切死に死や死といえれ  
 るはまをまをどの事あらぬ一菴とおもてると打  
 笑へ九郎左衛門尉狩野どのいにくもいよれた  
 今朝より余不とのたかかひみ士卒も多く疲ま  
 たり御老体も御休息あれ又こそ見参仕りひを  
 めと相引よひさけまは狩野も志のくくと城中へ  
 引ていひ

狩野一菴初隱岐守房祐といふ。享祿元年戊子つひ生る。父を河内守房永といふ。北條氏康は法かへ軍功を以て上野國勢多郡南雲長井坂の城主とかる。房永の父を兵庫助房清といふ。房清の父を彦三郎祐房といふ。祐房の父を兵庫頭義祐と云。永正十四年をめぐりめ。早雲入道み志かひしよ。一菴まで五代の間北條家の功臣たり。一菴の嗣を主膳正祐範といふ。氏直は法かへく小田原ふ籠城とかつ。法かへ加列勢中山勘解由を追まりまき。やら道のさしと法かへあたる。狩野ありかへり。只一騎

中山と共に死しんとかけいひのさへ。勘解由大か力を得。狩野とのう。一菴中山とのう。勘解由ふふいぎふ今まで死しせはたがひふ面會られくひはらはいま一軍してこの不どの。眠氣さまひと又立りのささらるまりは狩野う手ふハ小林隼人景の身を替へ人如く相志さかひをさらしめるをかさしてはちらきたらう九郎左衛門尉う。狩野をのかさし心中を後にある人とひけさのはさしのことは筑前のの乃仰は八王子の城みこのは中山勘解由。狩野一菴いのれもよろしき侍ねういらみして是を味方みかく早雲氏綱氏康の軍の死置をさかさや

二月二十一日

とおりの形り相かまへる出合いとぎこころして  
是をもちと仰られしよりせめて手立か  
しめとも返事せしあはれぬ名乗をさして  
ちりめきその人を知たれぬあやうし討らひ  
形りと語りぬかや

中山勘解由家範勇戦の事

并横地監物の事

中山勘解由家範といひ一の勘解由左衛門家勝の  
長男なり家勝天正元年五十九歳みり卒しその時  
家範ハ助六とく廿六歳なり家督をのきて武藏國  
高麗郡加治郷に住み北條陸奥守氏輝の旗下みり

度々の武功父祖みをとらぬややく勘解由と名  
乗しなり陸奥守小田原へ籠るとく横地監物中山  
勘解由狩野一菴近藤出羽介をよびよせ一獻の上  
みり陸奥守申けるハ今度關白殿下當家を攻漬さ  
んとて下向あり勢ハ畿内南海山陰山陽の勢を催  
し廿餘万とさきり定めて十七八万ハあはらん  
味方ハ多くて五六万ハよき軍のあらひ多  
勢をとり勝ともいれしは是とも當家關東の  
兵權を取ること五代百餘年みをよへり武運をてみ  
やくむき人情ふけきをいれし我今小田原をたぐ  
へし千一もの當城へかへはへるあらは面々

心を一のみにしてよく守りてたびゆへとく。鐵よき  
太刀一腰をひうれしかの時のいめもく  
猿冠者何不どの事を仕出しゆへき。必定御利  
運みくひひかんと色代して別れく。八王子の  
持場へ入しぬる中山勘解由の陸奥守ふいを  
れし言葉の猶耳もありといひく。二心かく三の丸  
を守り寄手を防ぎけふ処。藤田能登守り手の者  
水の手の谷間をまゝつて責のつける。成して今  
は是までなり。最後の戦あ。後よくせよ。やとお  
りひ定め重代の鎧よ。長鳥帽子といひ。堦を着し  
寄手の中へまゝつて入。蜘蛛手かくか。十文字もまゝ

まのりか。上杉勢左右形く。ちうのき得をやく  
は処へ。藤田う手より。神保五左衛門尉と名乗三の  
丸へ乗入やいかや首とりてけむ。ひきかへして  
藤田う前ふのころ。一番首ふいと申けむ。能登守  
まゝてやをれ。神保よ無下。いくさの故實をあら  
ぬものか。その場をひきてあ。軍功を無みま  
ふとよと志かり。か。五左衛門尉そのま。ひき  
かへし。多くの敵を突伏。かせきけふを能登守  
高聲よあ。ある。神保五左衛門尉をく。美事  
ふ。む。そのか。か。い。も。法。て。神保た。ま。め  
よ。五左衛門尉ら。ま。と。鞍の上。立。あ。り。

二月廿二日編六十一

下知しけるも、神保もまじく、面目をなごりし  
 けり。城方入て、中山勘解由、狩野一菴こゝに打出  
 かゝこゝに突合あつて、口われ、こゝにきて、又一所  
 へ馬をわけ、まゝ変化自在なまを、つゝまた色、敵を  
 も多く不ろぼく、つゝ、味方も大か、討れ  
 しかば、中山狩野討のこは、つゝ、兵士ともみむかひ  
 年來の君恩をり、たまふ、たゞ、今の軍ふり、あ  
 まこと、一騎當千と申へ、か、ゆ、その、ふの手  
 本、名をも、の、あ、坂東の武士の名誉を、は、く、へ、  
 事、先祖の靈魂も、は、た、か、ら、れ、く、お、り、へ、く、早  
 雲氏綱氏康の尊靈も、い、ろ、ふ、よろこび、たまふ、らん

たゞ、北條殿の御運を、ひ、ら、か、せ、たま、へ、  
 と、い、お、り、し、れ、必、定、滅、亡、遠、ら、ら、れ、よ、う、て、  
 日、の、意、せ、み、奉、公、の、忠、に、十、分、み、面、々、を、ち  
 た、ま、ひ、て、い、の、ち、成、全、く、父、祖、へ、の、孝、を、い、く、子  
 孫、の、繁、昌、を、た、の、せ、た、ま、へ、や、と、い、く、と、諫、め  
 け、り、討、の、あ、さ、れ、は、た、も、の、二、百、余、人、あ、ま、け、る  
 かい、ゆ、き、も、い、言、葉、を、せ、ら、へ、お、ち、よ、子、孫、の、後、業  
 を、計、し、よ、と、仰、ら、れ、い、ろ、あ、あ、い、お、く、我、等、人、か、  
 み、い、ろ、を、結、ん、だ、北、條、家、の、旗、本、よ、小、田、原、の、御、家、人、と、  
 い、ひ、り、い、し、れ、ゆ、て、今、ま、て、肘、を、と、り、腕、を、か、  
 一、身、の、い、う、て、や、ら、み、く、北、條、と、い、く、旗、を、も、て、誰、う

かけみかくれひへき北條どの御運はきたまふ  
 時よのぞき身のかきゆきまゝ落人と形うれをい  
 のま乃在所みてうごころよく一飯をも不どころ  
 一夜のやどをも貸をのあらんや我々う心中を御  
 うたがひひての仰みや我れおしみ於ての御命の  
 のく侍処まで御供申へくゆと眼よかどたて馬  
 の前後よあらび立いの勇まるとも猛るともいふ  
 へきやうおきおかりけせ中山狩野ををそて涙  
 をそらけくと流しそのかしの人々や千貫二千貫  
 の高禄うけし人々一郡一城の主たるそのさへ此  
 日頃ふごころう成いさき寄手へ降参しゆるとお

不しく旗の紋よかくれおしそのかりみて面々の  
 そのらよ十貫廿貫の小知あるよ左様よおのひ切  
 たすふを我々うごころよくらへき落よかくれよ  
 といひしかと人々よはぶきまれんおとこを口惜  
 けせあらうがの侍衆よも忠義のみのよふや左  
 などの人を討せんを何不とう惜けせとも左何ら  
 の我等よのぐさたまへと呼せらるおから中山助解  
 由真先よまきむをうて狩野一菴おみかひ後れん  
 かくこそかくれと鎗をとりにてつぎめくれの二百  
 余人前後左右を取かおえちと後れまかけたる  
 けりおのひきうその共の死をのぐゆひおせり

うのち手いやくをばめくも猛くけ色の加列勢  
 大勢おと共めと立られて颯とひく引立られい  
 き不ひみ總軍まてみくむれんとおけりて  
 長九郎左衛門尉たち何かり敵のつやも二百余  
 人勢中みはくんで一人もあまを九郎左衛門尉  
 一番鎗ぞとまきくろは岡部式部堀内入道一秀  
 南五郎左衛門尉同一齋軒主をとりははくすた  
 り山崎長門守らおへより勝部半左衛門山田村  
 左助九郎左衛門尉どののちや一陣まきくす玉ふ  
 形り我等もあまとき後るへきと大音も名乗あう  
 らかけたるおの中山狩野莞尔とりらひ北國や

みはその不う共をわり弓矢のまが茂志りみる  
 殊勝ありおさかのきそといふまよ中山勘解由  
 四尺五寸の太刀を以て岡部式部堀のちをわ  
 せよ碎けよとらちけ色のから竹刺といふもの  
 打さよそのま倒れ死すけりけりは色とも寄  
 手の大勢をう終り三の左の外形をうち破り出  
 入けれの中山も狩野も城中へ引てけり夏目舎人  
 助の本丸も衆入て見ゆる横地監物大よささ思  
 右衛門同十藏青木善太夫はくい本丸へ乗こ  
 たり監物はこの体をこてこ口惜城中ふて鬼

かくもあつるべき身う何とて爰まで落たりけん  
 去りしおきて立たりはけり此時まで監物も付  
 漆居たまける小性も中澤半藏といふその監物も  
 申けふへ御覽の如く敵大勢入て取圍まくり遁れ  
 たまふへきとちもかくいおそれ御自害に御死  
 骸をいよろしくかくし申へきふいとましくむせの  
 監物もうべ形つゝ我死をへき処を失ひしこの  
 そづかしく然の汝我かららんあとのとよくせよ  
 といひおき腹十文字もかき切の半藏後へまはり  
 水もたまらぬ首うちおくりその首を監物も着た  
 る帷子もひきめくゝ越後の陣へもく入るべし

横地監物も郎等も監物末期も申置けり我れか  
 一自害仕ゆるれは付て家内ものありけり女童兩三  
 人もゆいゆいと幼稚のものも御旗本も首おろ  
 けりやう願ひ奉ると申けしは弾正大弼景勝も  
 をえり不思議のものをいひやうかを同く腹を  
 さらへくへ當手へむかつ尋常も言葉をかき  
 そのくちみても澤からその上本丸みでのこと  
 みもあらは是の一定監物も逃出をその奴めり  
 たす打し相違ありし見よやと下知  
 あまけしの中澤を手とり足とり責めると半藏  
 苦も堪へ糸有のまくも白状も景勝これ



をきくたまひふくき奴の振舞かき世の不忠との  
の足さらしよせよとて引さう切よきられけり

重修真書太閤記十一編卷之廿一終

